

おふでさきの 世界を歩く

第
2
回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】
本部准員
天理教校本科研究課程主任

「おふでさき」執筆のころ

筆を執られたご様子

教祖は、明治二（一八六九）年正月に初めて「おふでさき」の筆を執られました。そのときの様子について、諸井政一^{もろい まさいち}「道すがら外編」は次のように伝えています。

^{あそびさされ}この年の正月から、御教祖様御筆をおとり被遊^{あそび}て、三十一文字づゝにつめて、おさとし

のかどめくをおかきつけになりました。ござります。これが、御筆先と申すのでござりまして、時々、神様のおさしづによつて、御筆をおとりあそばされて、二下りか三下り御かきになる事もあれば、又一枚二枚つづけておかき被遊事^{また あそびさされること}もある。さういふのが、だんくたまりますと、又神様のおさしづで、是^{これ}を一トまとめに御清書あそばして、一冊の本となされたのでござります。



それが、この明治二年の三月までに、一冊で
きまして、三月から又一冊できました。

〔正文遺韻抄〕道友社、昭和45年、70ページ

明治二年正月から、親神様の指図によって筆を執
られるようになったということ。そして、詠まれる
お歌は、二、三首のときもあれば、和紙に一枚二枚
続けられたこともあり、それらがだんだんたまと
教祖はひとまとめに清書され、一冊の本とされたと
あります(※1)。この一冊にまとめられたものが、
「おふでさき」の各号に当たります。明治二年三月
までに第一号が、同年三月から第二号ができたと言
べられています。

「おふでさき」第一号の表紙には、次のように記さ
れています。

第壹号

七十貳才老女

明治貳巳年正月從

「七十貳才老女」は、教祖を指します。「明治貳巳
年正月從」とありますが、「貳」は「二」の旧字で、

「巳」はへび年、「正月」は旧暦の一月を意味し、
「從」は「より」と読みます。「おふでさき」第一
号は、教祖が数え七十二歳のとき、明治二年正月よ
り執筆されたものであるということが述べられてい
ます。

なお、表紙は、教祖がお書きになったものではあ
りません。宇野晴義「天理教資料研究(二)」(『ビブリ
ア』第53号)という研究によりますと、第一号から第
十三号までの各表紙の文字は、当時「おふでさき」
を保管しておられた教祖の長男である秀司様のもの、
第十四号の「第十四号」の字は秀司様であるが「明
治十貳年六月ヨリ」の字は山澤良治郎やまさわらやうじろうのもの、それ
以後第十七号までの表紙字はすべて山澤良治郎の筆
によるものと推定されています。山澤氏は、明治十
四年に秀司様が出直された後、お屋敷の家事万端取
締をつとめていました。

明治二年までの道の状況(二)
——つとめ場所のふしん

「おふでさき」第一号は明治二年正月ごろから筆を
執られたといいました。それでは、明治二年ごろの

明治2年までの道の様子——年表

元号／年	出来事
文久元(1861)	このころ、参拝者の中から信仰者ができはじめる
元治元(1864)	春ごろから、扇のさづけなど授けものを 出される つとめ場所の普請 大和神社前の一件
慶応元(1865)	僧侶の論難 助造事件
2(1866)	小泉不動院の山伏による乱暴事件 「あしきはらひたすけたまへ てんり わうのみこと」を教えられる
3(1867)	正月から八月まで「十二下り」を教え られる。以後、節付けと振付けに満3 カ年かけられる 7月、吉田神祇管領より認可
明治2(1869)	正月から「おふでさき」第一号ご執筆

お道の様子はどのようなものだったのでしょうか。

『稿本天理教教祖伝』(以下、『教祖伝』)に基づいて、
當時を簡単に振り返りたいと思います。

天保九(一八三八)年十月二十六日に「月日のよし
ろ」とお定まりになった教祖が一番初めになされた
ことは、貧に落ちきることでした。

「貧に落ち切れ。貧に落ち切らねば、難儀なる

者の味が分らん」

(『稿本天理教教祖伝逸話篇』「四 一粒万倍にして返す」)

とのお言葉のままに、教祖は、徹底して施し尽くさ
れ、人に与える道を歩み続けられました。その道中
には、炊く米がないというときもありましたが、

「水を飲めば水の味がする」

(『教祖伝』40ページ)

とお諭しくださり、心豊かに勇んでお通りください
ました。二代真柱様のお言葉をお借りするなら、裸
になって陽気ぐらしの真実の道をお付けくださった
のです(※2)。

そのような道中が二十年以上続きましたが、天保
九年の立教から二十数年を経たころ、ようやくこの
道は広がり始め、文久、元治に入ると、後によふほ
くとして勤めるようになる人々も次々と引き寄せら
れ、親里へ帰ってくるようになりました。立教のと
きの押し問答の一節に、

「今は種々と心配するは無理でないけれど、二
十年三十年経ったなれば、皆の者成程(なるほど)と思
う日が来る程に」
(『教祖伝』7ページ)

とお諭しくございましたが、二十年三十年経ったこ



ろから、道は大きく動き始めたのです。

元治元（一八六四）年（立教二七年）には、人々の真心が寄り集まって、つとめ場所の普請が始まりました。途中、大和神社前の一件により、教えを聞いて日の浅い人のなかには、不安を感じて信仰をやめてしまう者もありましたが、飯降伊蔵（いげりいざう）を中心に真実を尽くされた結果、普請は完成しました。

人々にとつてみれば、途中に大きな「ふし」があったこともあり、完成の喜びはひとしおであったと想像します。

『教祖伝』に、

新築成つた明るい綺麗（きれい）なつとめ場所こそ、正しく成人の歩を進めた、心のふしんの姿であり、きりなしふしんへの門出であつた。

（61—62ページ）

とあるように、つとめ場所の普請は人々の成人のうえで大きな出来事でした。

普請という神様の御用と大和神社の事件という「ふし」を経たことで、信者の人々の心は磨かれ、成人の歩みを一歩踏み出したのです。

そうしたなか、「みかぐらうた」の三下り目に、

ひのもしよやしきの

つとめのばしよハよのもとや （三下り目 1）

ふしぎなつとめばしよハ

たれにたのみはかけねども （三下り目 2）

みなせかいがよりあうて

でけたちきたるがこれふしぎ （三下り目 3）

よう／＼こゝまでついできた

じつのたすけハこれからや （三下り目 4）

いつもわらはれそしられて

めづらしたすけをするほどに （三下り目 5）

とあります。

つとめ場所の普請が完成したことを、「でけたちきたるがこれふしぎ」「よう／＼こゝまでついできた」といわれたうえで、これからいよいよ本格的に「じつのたすけ」に取り掛かり、いずれは「つとめ」によつて「めづらしたすけ」を授けるようにすると宣言されたのです。

明治二年までの道の状況（二）

——「おつとめ」の教示

つとめ場所ができるまで、教祖は、古い粗末な八

畳と六畳の二間にお住まいになり、その八畳の間には目標^{めく}として御幣がまつられてあり、人々の寄り集う部屋ともなっていました。つとめ場所が建てられてからは、上段の間の神床^{かんしど}に親神様をおまつりし、教祖は、同じ部屋の西寄りに壇を置いて、その上に終日端座^{たんざ}され、寄り来る人々に、お話を説き聞かせてくださるようになりました。

教祖が日夜、お話を繰り返しお説き聞かせくださったことで、信者の人々のお道に対する理解も少しずつ深まり、信仰を始める人も次第に増えてきました。

ところが、慶応年間に入り、「庄屋敷村の生神様^{しややしき いきがみ}」の評判が高まるにつれ、近在の神職や僧侶、山伏、医者たちが妨害をしに、お屋敷へやって来るようになりました。慶応元（一八六五）年六月には、二人の僧侶がお屋敷に乱入し、同二年秋には、小泉不動院^{こいずみ}の山伏たちがお屋敷に論難にやってきたうえで、乱暴をはたらくという事件がありました。

教祖が、「おつとめ」を本格的に教え始められたのは、このころのことになります。たとえ論難攻撃に遭っても、それに動じないだけの信仰信念が、信

者の人々の中に育まれてきたことを見定めたうえで、「おつとめ」の教示に取りかかれたのではないでしょうか。

慶応二年にまず、「あしきはらひたすけたまへてんりわうのみこと」の歌と手振りを朝夕のおつとめとして教えられました。信者たちが日々、「かりもの」のご守護に感謝するとともに、心の「ほこり」を払うように導かれたのです（※3）。

そして、翌慶応三年正月から八月にかけて、教祖は「十二下り」の歌を作られました。慶応三年は、立教からちょうど三十年目に当たります。それから教祖は「十二下り」の節付けと振付け^{ふり}に、満三力年かけられました。

慶応三年から満三年というと明治三年になります。ですから、「おふでさき」第一号が執筆された明治二年正月ごろのお屋敷は、教祖から十二下りの手を付けていただいている最中になります。

また、このころのお屋敷は、慶応三年七月に、吉田神祇管領^{だじんぎ}から認可を得たことで僧侶や山伏からの反対攻撃が減り、お屋敷を取り巻く状況は、比較的穏やかな時期でもありました。



そのような中で、

よるひるとんちやんつとめする

そばもやかましようたてかる (四下り目 4)

といわれるように、「かぐらづとめ」こそまだ教えられていないものの、お屋敷は、連日「おてふり」の稽古でにぎわっていたと想像します。

明治一年までの道の状況 (三) ——世界のふしんに取りかかる

『教祖伝』には、「十二下り」を教えられたときの教祖のお言葉が掲載されています。

「これは、理の歌や。理に合わせて踊るのやで。

ただ踊るのではない、理を振るのや」

「つとめに、手がぐにやぐにやるのは、心がぐにやぐにやしているからや。一つ手の振り方間違^{まちが}ても、宜敷^{よろしく}ない。このつとめで命の切換^{きりかえ}するのや。大切なつとめやで」

『教祖伝』95ページ

教祖はこのようなお言葉を掛けながら、「おてふり」の稽古をつけて、理を仕込み、おそばの信者を導いていきました。

「十二下り」には、天保九年の立教からの教祖の道すがらや、教祖が折々にお説きくだされた教えが、まとまった形で歌い込まれています。「親神様が元の神、実の神であるということ」「お屋敷が元のやしきであること」「かしの・かりもの」の理、「病のもととは心からということ」「心を澄みきらすということ」「陽気づくめ」「ひのきしん」など、こんにち説かれているような教えの骨格となるところについては、「おふでさき」の筆を執られる前のこのころまでに、すでにだいたい教えられていたのではないかと思います。

そして、「十二下り」には、そのような、日々の信仰生活の基本的心得が歌われるとともに、親神様と人間が共に働いて「世界のふしん」を進めていく様子が、明るい喜びをもってしるされています。特に、最後の十二下り目は、

このたびいちれつに

だいくのにんもそろひきた (十二下り目 10)

というように、これから「世界のふしん」に、「世界たすけ」に本格的に取りかかっているこうとする明るい未来への展望をもって締めくくられています。

教祖が「十二下り」を教えてください。さつた当時、日本の世の中は、慶応から明治という激動の転換の時代を迎えていました。そのなかで、教祖ご自身の目には、将来の輝かしい世界が、そして、そこに向かう確かな道筋がはつきり見えておられるかのように感じます。

このころから、教祖は、「世界のふしん」を目指して本格的に「つとめ」の教示に取りかかれ、「よふぼく」となる人々をお屋敷へ引き寄せ、教理を仕込んだうえで、この道を伝え広げていこうとなされるのです。

「おふでさき」の筆を執られることになった明治二年は、こうした時期にあたるのです。

「おふでさき」の二つの柱

「おふでさき」は、教祖が「世界のふしん」を目指して本格的に「つとめ」を教え、信者を仕込まれたところから執筆を開始されたと述べました。

「おふでさき」が書かれた明治二年から同十五年ごろという時期は、教祖が信者に「つとめ」や教理を

仕込まれた時期と大きく重なります。

たとえば、その一例として、「おつとめ」は明治十五年に形のうえで一応の完成を見ますが、それとほぼ時を同じくして、教祖は、「おふでさき」の筆をお握られています。

前回、「おふでさき」は「世界たすけに向けての地図」のようなもので、親神様がどのようにして世界を陽気ぐらしに導いていかれるのか、どのようにして世界中の人間の心を勇ませ、たすけていかれるのかということがしるされると述べました。それは、これまで述べてきたような、「おふでさき」がしるされた当時のお道の状況が関係しているかもしれません。

それでは、具体的にその「世界たすけ」はどのようにして進められていくのか。「おふでさき」は明治二年から十五年という長い年月をかけて執筆されましたが、その内容には二つの柱があるとされます（※4）。

① ッうち（お屋敷にいる人々、お道を信心する人々）の心を澄まし、「はしら」（かんろだい、真柱）を入れ、「かぐらつとめ」が勤められる



ようにすること。

②「せかい」(お道を信心していない世の中の
人々)に向かつて布教伝道をし、真実の神の話
を伝えて、心を勇ませ、たすけ上げていくこと。

「よふぼく」となる人を「お屋敷」へ引き寄せ、
教理を仕込んだうえで、布教伝道に出すこと)

端的に言って、この二つが「おふでさき」全体を
貫く大きな話の筋ということになります。この①と
②が相まって、親神様による「世界たすけ」は進め
られていきます。その見取り図が「おふでさき」で
あるということができるでしょう。

おそらく教祖は、このような構想のお話について
も、繰り返しお話しになっていたのではないでしょ
うか。

これまでどんな事も言葉に述べた処^{ところ}が忘れる。
忘れるからふでさきに知らし置いた。ふでさき
というは、軽いようで重い。軽い心持つてはい
けん。話の台であろう。取り違いありてはなら
ん。(中略)一時の処言葉^{やす}だけでは忘れ易い。
書きた事は忘れんもの。

(明治37・8・23)

という思召から、後に続く私たちのために、「おふ
でさき」に書き残しておいてくださったのではない
かと思案します。

「おふでさき」と「ひながた」は表裏一体

大事なことは、教祖ご自身も、この「おふでさき」
にお示しくだされた二つの道筋に沿って歩まれてい
るということです。

「稿本はしがき」に述べられてあるとおり、『教祖
伝』の大きな特徴の一つは、「おふでさき」に基づ
いて記されているということです。

特に、「第六章 ちば定め」と「第七章 ふしか
ら芽が出る」は、「おふでさき」に基づいて記され
ています。「おふでさき」が第一号から順を追って
記され、明治二年から同十四年までの史実が「おふ
でさき」の順序によってまとめられているのです
(※5)。

『教祖伝』は、第六章あたりに入ってくると、現存
する史料も増えてくるため、それまでと比べて記述
が詳しくなってきました。その分、教祖はどこに向か

われて、何をしようとなされているのか、そのポイントが掴みにくくなっているような気がします。

しかし、「おふでさき」に基づいて記されているということは、言い換えると、「第六章、第七章の内容」Ⅱ「おふでさきにしろされた思召」ということになります。つまり、前項で述べた①と②の二つの柱に沿って、教祖は行動なされ、人を導いておられるのです。「おふでさき」と教祖の「ひながた」は表裏一体であると思案します。

大切なことは、「おふでさき」を読む際に、いまこの段落は「うち」の話をされているのか（つまり、「おつとめ」の段取りなどについて話をされているのか）、あるいは「せかい」の話をされているのか（つまり、世界に向かって布教伝道をしていく話を

されているのか）など、主題をよく考えて読むことです。同じ号の中でも、「うち」の話をされているかと思えば、突然、場面が切り替わって、「せかい」に向けての話をされているということがあります。

「話の場」を意識するということが大切です。

たとえば、第一号では、主に「うち」の話をされ、「おつとめ」が勤められる段取りとして、最初に、お屋敷の人々の心を澄ますという「やしきの掃除」が話題にされています。それに対して、第二号は「せかい」への布教伝道について言及されています。



それでは次回から、実際に第一号から段落ごとに読んでいきたいと思えます。

※1 清書されたということは、下書きがあると
いうことを意味し、これ

が「外冊」となったので
はなにかと推測される
（上原道延「おふでさき
における表紙の日付——
特に第三号から第五号を
めぐって」『天理教校論

おふでさき
の世界
を歩く

叢』第42号、天理教校本
科研究室、平成24年）参
照。

「おふでさき」の表紙や
日付をめぐる問題につい
ては、同論文の中で、興
味深い考察が行われてい
るので参照されたい。

なお、おふでさきご執
筆の様子については、道
友社編『先人の遺した教
話（一）静かなる炎の人・
梅谷四郎兵衛』昭和53年、
84ページを参照。

※2 中山正善『第十六
回教義講習会第一次講習
録抜粹』（道友社、立教160
年、152―153ページ）参照。
※3 「あしきはらひた
すけたまへ てんりわう
のみこと」の「おつとめ」

は、こんにち「あしきを
はらうてたすけたまへ
てんりわうのみこと」と

いう形で、「かぐらづと
め」においても勤められ
るが、教祖は一番初めに
「朝夕のおつとめ」とし
て教えられたものと理解
している。このことにつ
いては、以下を参照。

「……明治元年に『あし
きはらい、たすけたまへ、
天理王の命』となへて、
手品をして、朝晩のつと
めとすべき事を、御教へ
被下したのでござりま
す」（『正文遺韻抄』道友
社、昭和45年、65ページ）
※4 芹澤茂『おふでさ
き通訳』（道友社、昭和56
年）には、次のように述

べられている。

「……まず『うち』には
かんろだいのつとめを中
心として『こふき』（こう
き）を拵え、次いで『せ
かい』に『こふき』をひ
ろめる布教伝道をするこ
うのが、おふでさき全
篇を貫く大きな話の筋で
ある」（23ページ）

※5 中山正善「陽気ぐ
らしの真髓」『みちのと
も』昭和32年1月号27ペ
ージ参照。

なお、「第八章 親心」
も「おふでさき」に基づ
いて記されているが、こ
ちらは史実ではなく、五
十年のひながたを貫く教
祖のお心について述べら
れている。